



豊橋市美術博物館友の会だより

-2013年-冬号 Vol.84
FU風伯HAKU
Winter 2013

特集「アートとは何か」鑑賞講座②

高校までは美術の授業があったものの、ただの一度も絵の味わい方を教わったことはない。一枚の絵を眺めるだけで、どこまで深く迫れるのか心もとない時もある。画家の身分や受けた賞の重みを材料に、あたかもそれが自分の評価であるように思い込みたい気持ちになるときもある。しかし権威ある賞とは一体何のことなのだろうか。蘊蓄で評価しても仕方がない。絵の発するオーラだけで絵を味わいたい。自分自身の評価で絵を、そして音楽を味わいたい。安井賞40年の歴史も私達にそう教えてくれている。

安井賞と戦後洋画壇 ～受賞3作家の画業から～

藤田一人(美術ジャーナリスト)

世に権威ある“賞”は、受賞者のその後のキャリアを少なからず決定付けることになります。例えば、文学の芥川賞と直木賞は前者が純文学、後者が大衆文学といった創設当初の評価基準は時とともに変質しながらも、日本文壇の登竜門としての影響力を持ち続けてきました。石原慎太郎は作家として未だに“芥川賞作家”と称され、最近亡くなった藤本義一も訃報記事に“直木賞作家”と書かれていました。それほど両賞の権威は大きいということです。

画壇においても、そうした“賞”がありました。それが1957年から1997年にかけて40年間続いた安井賞です。豊橋市美術博物館も島田章三、八島正明、櫃田伸也という3名の安井賞画家の作品を所蔵しています。今日は安井賞画家3名の作品とキャリアを通して、安井賞と戦後洋画壇の如何にも日本的な展開についてお話ししたいと思います。

安井賞は、梅原龍三郎とともに大正・昭和期の洋画壇をリードした安井曾太郎を顕彰する美術賞でした。安井曾太郎は1955年に亡くなり、翌56年に当時の国立近代美術館、現在の東京国立近代美術館とブリヂストン美術館で大規模な回顧展が開催されました。その純益金で財安井曾太郎記念会を創設。その主要事業として、当時の国立近代美術館と共催で「安井賞候補新人展」

を立ち上げ、将来有望な新人画家を選考し、安井賞を贈ることを決定。そうして1957年に第1回展がスタート。その後、展覧会名が「安井賞展」と改称され、一部主催者や規則等の変化はありましたが、安井賞は「画壇の芥川賞」と称されるようになっていきました。

そんな安井賞展と安井賞の特色はというと、大きく二つのことが言えます。一つは、戦後日本の“具象絵画”の新たな模索と展開を指向し続けてきたこと。もう一つは、一般公募ではなく、美術団体と美術評論家等の推薦制を取り、美術団体を中心とする所謂既成洋画壇の若手画家を対象に、従来の団体の年功序列的ピラミッド体制とは一線を画す形で、新人を世に送り出すことを意図したこと。そして、その40年の歴史を顧みると、私は前者よりも後者の意義の方が大きかったように思えます。

前者は、安井賞が制定された当時の日本の美術的潮流が大きく影響しています。1957年後半、フランスのアンフォルメルやアメリカの抽象表現主義といった、流動的な筆致と強いマチエールを前面に押し出した“熱い抽象”が日本に紹介され、その後1960年代にかけて美術界を席卷します。既存の美術団体も例外ではありませんでした。そんな状況に危機感を抱いた人々が、骨太な描線と鮮やかな色調を駆使した描写による、日本的油絵のスタイルを確立した安井曾太郎の名の下に、時の“抽象”の台頭に抗しようとしたわけです。そして同賞の選考条件として「作品は具象的傾向の作風の



ものに限る」と明記され、最後まで変わることはありませんでした。

しかし、第2次大戦後の抽象美術運動に対抗する新たな具象絵画の理念や方向性を、安井賞を立ち上げた当時の識者達が明確に持っていたわけではありません。むしろ、新しい抽象の波に圧倒されつつ、従来の古典的写実や日本の文人画的な表現主義から脱して、現代社会に生きる者としての具体的な現実とは何か？なる問いに暗中模索している、というのが実情だったのでしょう。これから映像でお見せする歴代の安井賞受賞作40点を通観されると、そこでの具象絵画というものの揺れ動きが一目瞭然だと思います。(第1回から40回までの安井賞受賞作を映像で示す。)

御覧のように、受賞作の傾向は時代とともに大きく変化してきたことがお分かりになったでしょう。そしてその変化は、およそ4つの時期に分けられると思います。

まず、第1回から5回までは、“抽象の影響と融合の模索”期といえいいでしょうか。例えば、第1回受賞作・田中岑の《海辺》は、淡い水色と鮮やかな朱色に二分された色面の間に濃い紺色が垣間見えるだけの画面。さらに第4回受賞作・深見隆の《風化》になると、厚く塗られた白い絵具地に裂け目のような傷が黒い線で刻まれているだけ。もはや抽象画といってもいいでしょうが、タイトルでその具体的イメージを膨らますことが出来るというところでしょう。

次いで、第6回から11回は“具体的描写の復活”といえるでしょう。抽象的画面構成のなかに人間や動植物等の具体的形態が浮かび上がってきます。今回取り上げる鳥田章三は、1967年度第11回安井賞受賞者です。受賞作《母と子のスペース》は、表現主義的な色彩と筆致で馬小屋の母子を描き、キリスト生誕をイメージさせます。因みに、この時期から対象画家の年齢制限が40歳未満から50歳未満に引き上げられました。

そして、12回から30回ぐらいまでは“多彩な具象表現の台頭”期ということになるのでしょうか。1960年代も末に至ると抽象の波も沈静化し、具象への回帰という気運が起こります。さらに70年代になると、“絵画ブーム”というような百貨店を中心に美術市場の大衆化が進むなかで、具象絵画が世に幅広く求められるように

なりました。そして安井賞画家は市場の人気作家にもなっていきます。第12回受賞・鴨居玲の心理的人間ドラマ、第13回受賞・藤田吉香、第17回受賞・絹谷幸二、第24回受賞・有元利夫等の西洋の古典技法や様式の現代的アレンジ、第19回受賞・三栖右嗣の迫真的写実、等々。具象絵画の領域が大きく広がっていきました。

そんななかで、鳥田とともに今回取り上げる、八島正明は第18回、櫃田伸也は第28回の受賞者です。ともに当時としては、独自の具象表現が高い評価を受け、キャリアを決定付けることになりました。また、1969年の13回からは佳作賞が設けられ、豊橋市美術博物館にも、第14回佳作賞の齋藤真一、同じく第21回の藪野健の作品が収蔵されています。その収蔵作品はともに受賞時期と近く、当時の評価がうかがえるでしょう。(齋藤真一《梅雨の頃》(1971年)は常設展示室に展示中)

さらにそれ以降、最終の40回までは、“既成の洋画壇と現代美術という新たな枠組みとの葛藤”期といえいいでしょうか。具象表現という絵作りのあり様は同じでも、画家としての立ち位置、意識の溝が以前にも増して浮き彫りになってくる。そんななかで、洋画壇を担うべき新人画家の登竜門としての安井賞のポジションが曖昧になったことが、その権威と影響力の衰退に繋がっていったのではないかと、私は考えています。そうして1997年第40回で、安井賞は終焉を迎えることになりました。

さて、それでは本題である安井賞画家3名の当館所蔵作品から、戦後日本洋画なるものの成果と課題へと話を進めていきましょう。

まずは、鳥田章三の《マイタウン・タカミネ》です。この作品は1990年制作ということなので、安井賞受賞から23年を経ています。作風も、モチーフも全く異なっています。鳥



鳥田章三《マイタウン・タカミネ》1990年

田章三は皆さんもご存じのように文化功労者で、長年愛知県立芸術大学教授として後進の指導に当たり、学長も務めました。そんな島田章三は1958年に東京芸術大学美術学部油画科を卒業。芸大では工藤哲己、高松次郎、中西夏之等、読売アンデパンダン展等で注目された前衛美術家が同級生。それに対して、島田は在学中から国展に初入選で国画賞を受賞、そして卒業後間もなく国画会会員となる等、洋画壇のエリートといふべき順風満帆のデビューを飾ります。しかし、時はまさにアンフォルメル旋風の真只中。島田もその洗礼を受けました。暗い色調のフォーヴィックな画面からスタートし、アンフォルメルの影響で厚塗りのマチエールと形態の抽象化を進めていきます。それからしばらくして具体的形態を取戻し、色調が明るくなるなかで安井賞を受賞しました。

受賞の翌年、島田は渡欧。20世紀初頭のキュビズム作品を観て、そのシッカリとした形態の把握と画面構成に影響を受け、キュビズムを日本的に翻訳しようと試みます。それが1970年代以降の“かたちびと”なる独自の人物表現の様式と空間表現を確立していきます。そこには情緒に流されず、西洋の客観的な現実把握を体得しようとする洋画家ならではの志向があるといえます。ただ、当初のそれは幾何学的な形態に無理やり人物や情景を嵌め込んだようで、私としては何か息苦しさを感じます。その印象が変わり始めたのが1990年代以降、ちょうどこの作品が描かれた頃からです。“タカミネ”は画家が暮らす町ということですが、この作品を観ていてキュビズムなる様式などほとんど気に掛かりません。むしろ興味を引くのは、道路を走る自動車や空を飛ぶヘリコプターそして鉄塔といった、親しみ深い風俗表現。島田の具象絵画の魅力とは、画家が言うキュービックな造形性というよりも、日常的な日本の“いま”を明るく肯定的に捉えていることだと思います。本人は否定するかもしれませんが、私は島田章三を今日の代表的な風俗画家だと考えています。

次は、八島正明の《アパート》です。1974年度の安井賞受賞から少し後ですが、受賞作の《放課後》とよく似た作品で、八島正明という画家の真価を十分に示す作品です。八島絵画の特徴は、キャンバスに下塗り



八島正明《アパート》1977年

の白を塗り込め、その上に黒を塗った後、半乾きの状態で木綿針を用いて表層の絵具を引っ搔いて描いていきます。そして、描かれたモノクロの情景には人物の姿はなく、その影のみが置き去りにされたように印されています。それは広島への原爆投下の際、閃光で石段に焼き付けられた人影をイメージしたものだと言います。受賞当時を思い返すと、高度経済成長が一段落し、公害問題をはじめ戦後復興の負の要素が大きな問題になってきた時代。そんななかで、八島の影だけが焼き付けられたモノクロの世界は、“人間存在の不安”を印象付けると評されました。また当時、そうした戦後社会の影の部分を探るようなアングラ的な幻想表現も台頭していました。それも一つの時代を象徴する具象表現と言えるでしょう。その後、1980年代に入ると、八島の画面に人物が登場するようになりますが、それは実在する者というよりも、どこか失われた世界への郷愁を呼び起こします。この《アパート》という作品も画家自身が暮らした場所の情景なのでしょうが、そこには確かな現実などなく、捉えどころのない空しさを感じます。そうした現実の空虚を見つめる視線は、画家・八島正明に一貫していると言えます。

ところで、八島の安井賞受賞に際して、同賞が如何に社会的に注目されていたかを示すエピソードがあります。受賞作は最初、会員であった美術文化展に《小使いさん》と題して出品されました。それが、安井賞受賞が決まった際に“小使いさん”は差別用語だという指摘で、《放課後》と改められるようになったということです。毎日新聞社が主催者の一つということもありますが、美術団体展などとは違い、美術界にとどまらない一般的な注目度が高かったからなのでしょう。

そして最後は、櫃田伸也の《風に添って》です。これは1972年の作品で、櫃田が安井賞を受賞した1984年の《風景断片》よりも10年以上前の作品です。もはや抽象と言ってもいい《風景断片》と比べて、これははっきりとモノの形態が描かれた具象絵画です。しかし、画家が描こうとしているものはさほど差がないように思えます。櫃田が描こうとしているのは、具体的な物事や情景ではなく、移りゆく時間や流れる空気のような状況です。《風に添って》では机や棚、そこに載ったモノや植物が具体的に描かれてはいますが、主題は、棚が落ち、風が吹いて飛び散る水や、その痕としての



櫃田伸也《風に添って》1972年

シミ等に示された“動き”です。櫃田は時を経るにつれ、自然の“動き”“揺らめき”そのものを描こうとするようになったといえます。それは具体的に対象を描くというよりも、一つのイメージを作り上げるということになります。それは従来の具象絵画の大きな変貌でもあります。現在、櫃田伸也の評価は、愛知県立芸術大学教授時代に奈良美智等、現代美術家の恩師なる印象が強いようですが、画家としては具象絵画の領域を広げたことの方が注目されるべきだと、私は思います。

さて、こうした画家を輩出した安井賞が40年で終焉を迎えた背景には、幾つかの要因がありますが、最も大きかったのが、掲げられた“具象的表現”なるものの基本理念とその発展的方向性を、ついに見つけられなかったということでしょう。世のコンクールで最も問われるべきは、主催者の信念と展望です。多様な思考や価値観が入り乱れる現状で、何かを的確に選ぶためには、しっかりと判断基準が欠かせません。それが主催者の理念であり、授賞とはそれを具現化するものです。つまり、

“賞”とは受ける側より、与える側により大きな意味があるわけです。しかし、日本のコンクールや賞の多くは、主催者が明確な理念や方向性を掲げず、受賞者の可能性にもたれ掛ってきたのが実情です。

安井賞の場合も、“具象”の意味も方向性も曖昧にしながら、時代の空気に寄り添い続けました。そればかりではなく、対象とする画家、作品の範疇すら曖昧でした。それは美術団体を軸とするムラ社会の感覚で、日本の美術状況が展開してきたからでもあります。安井賞は、最初その対象を「具象的傾向」とともに「油絵」と明記し、その後「油絵およびそれに準ずるもの」になります。それは同賞が当時の洋画団体を主に考えると、ほとんどが油絵で、水彩やテンペラやフレスコそしてアクリル等は、洋画壇の範疇というわけです。しかし、それが“日本画”となると話が違います。1975年度第19回安井賞展に高畑郁子が創画展に出品した《クシャトリアの女》が推薦された際、入選の手が結構拳がりながらも、ある選考委員の「それは日本画だからダメだ！」の一言で落選となった。そして、その翌年から「日本画を除く」という一文が加えられました。そこから垣間見えるのは、具象かどうか、また技法や素材といった絵画の問題ではなく、日本美術の派閥構造の問題です。しかし、そうした派閥構造も時とともに変化し、“現代美術”なる勢力の台頭とともに、既存の枠組みに疑問が呈され、1988年度の第32回展から「日本画を除く」という文句は除かれました。こうした中にも、安井賞の定見の無さがうかがえるでしょう。

つまり、日本の美術賞というものは、各々の時代や社会状況を反映してはいても、作品の本質的な価値を決定付けるものではないということです。というよりも、一体決定的評価というものが美術にあるのでしょうか？

私は非常に疑問です。例え権威であったとしても、それは各々の範疇を超えるものではありません。結局は、各々が折々に目の前にした作品を評価していかなければならないということです。

「日本の美術賞というものは…」と筆者に言わしめる、日本の美術界の特殊性もまた興味深い。しかし本当にいいものに巡り会うのは難しいと感じた。(風伯編集部)

友の会創立25周年海外研修レポート

平成24年12月1日～3日、友の会創立25周年の台湾研修を開催しました(31名参加)。故宮博物院はじめ、台北市立美術館、台北當代芸術館、林本源園邸や蒋介石の旧邸宅、九份の街並などを見学してきました。その一端をご報告します。

現代アートと伝統アートに肘鉄食らう

～台北の現代アート美術館と故宮博物院に迷い込んで～

ふれでいー山崎(会員No.201)

〈現代アート その1〉 台北當代芸術館の巻

(太好了!)愛大・孔子学院で学んだばかりの中国語の言葉が心に浮かぶ。ここは台北當代芸術館である。バスの窓から仰ぎ観る芸術館の外壁は小さな何かで覆われつくしている。(なんだこれは?)

何十万個かのトンボの羽が、そぼ降る雨に打たれていた。

台湾の美術館に特に期待はしていず、油断をしていた。不意打ちを食らってしまう。(これは心してかからねば)

館の中に入る。(これはすごい!) 館内中に現代アート作品が気ままに楽しげに遊んでいる。特に李山(リーシャン)氏の「トンボ」の作品は(太好了!)とてもエキサイティングなのである。



ワクワクどきどき…。アドレナリンが次から次に湧いてくる。(すばらしい! なに～? 好!! 美極了!)



ボランティアであろうか。胸に名前のプレートを下げた若い人達があちらこちらに。そして、入場者も若い人が目につく。素晴らしいと思ったことは、作品のレベルの高さはもちろんであるが…「若い人達が現代美術に興味を持っている」このことだ。

〈現代アート その2〉 台北市立美術館の巻

(太好了!)台北市立美術館。ここでも中国語の感動の言葉が心に浮かぶ。美術館の玄関を入り…。すぐに



ノックアウトをくらう。何という事だ! 自分自身がアート作品の一部となっていたのだ。壁に強烈

な照明があり、その前を歩きながら中に入ってゆく。中に入って気付く。壁だと思っていたものは、巨大なスクリーンだった。そこには入場者の動く影が写されている。

メインのテーマは「戦争と虐待」であろうか。ドイツ人の作家が招待されこのテーマでインスタレーションしている。

作品の質の高さ、重厚さということでは素晴らしいことはもちろんだが、作品の見せ方という点でとても参考になった。すなわち、材料がどうか平面か立体かとか写真であるとか映像とか…表現方法はなんでもいいのだ。要はその作家が何を言いたいのが肝要なのだ。作品発表の次元の問題である。

〈伝統アート〉 国立故宮博物院の巻

(太好了!)国立故宮博物院に訪れるのは2回目である。以前来た時の印象はそれほどでもなかったが…。

今回は(来た甲斐があった)のだ。何故か? 台湾の旅行社の添乗員である宋子明(ソン・ツーミン)さんの展示物解説が絶妙かつ分かりやすかったからだ。伝統的な民族作品の見学でこれほど充実した鑑賞は過去に一度もない。宋氏に心から感謝である。それにしても中国4000年の歴史的文化のすごさに改めて感銘する。中国医学(漢方医学)を学ぶ者として、さらなる勉学に励もうと心に誓う。

今回の台湾美術館巡り…(太好了!)なのだ。

会員更新手続きをお願いいたします！

平成25年度の会員更新手続きをはじめます。次年度も、美術講座・ミニコンサート・研修旅行などの開催や、ホームページの充実など、会員の皆さんに楽しんでいただける企画を予定しています。お早目に更新手続きをお願いいたします。

※下記のいずれかの方法により会費をお支払いください。

- ①美術博物館 窓口にて会費をお支払いください
- ②郵便局 同封の払込票をご利用ください(手数料無料)
- ③銀行 下記口座へお振込みください(手数料有料)
三菱東京UFJ銀行 豊橋支店
普通 4806768
口座名/豊橋市美術博物館友の会



25年度会員証 東松照明「魔園」

平成25年度 展覧会スケジュール

※太字は有料展

美術博物館	会 期
「新」収藏品展 [美術] [歴史]	4 / 2 (火) ~ 6 / 16 (日) 5 / 11 (土) ~ 6 / 16 (日)
第35回豊橋美術展 [絵画・彫刻・デザイン]	4 / 30 (火) ~ 5 / 5 (日)
[写真・書道]	5 / 7 (火) ~ 5 / 12 (日)
生誕120年記念 木村莊八展	5 / 25 (土) ~ 7 / 7 (日)
夏休み企画展「こわい絵」	8 / 3 (土) ~ 9 / 15 (日)
培広庵コレクション「雪月花~美人画の四季~」	9 / 28 (土) ~ 11 / 10 (日)
第63回豊橋市民展 [写真・書道] [絵画・彫刻・デザイン]	12 / 10 (火) ~ 12 / 15 (日) 12 / 17 (火) ~ 12 / 22 (日)
収藏品展「墨のいろ~モノクロームの世界に遊ぶ~」	1 / 11 (土) ~ 2 / 11 (火)
柴田家文書展	2 / 18 (火) ~ 3 / 23 (日)
ハローキティ アート展	2 / 22 (土) ~ 3 / 30 (日)

※太字は企画展

二川宿本陣資料館	会 期
館蔵浮世絵展	4 / 27 (土) ~ 6 / 16 (日)
葛飾北斎展	7 / 20 (土) ~ 9 / 1 (日)
館蔵品展	9 / 7 (土) ~ 9 / 29 (日)
愛知県美術館サテライト展示 川瀬巴水展	10 / 5 (土) ~ 11 / 17 (日)
二川宿ゆかりの文人たち 田村幹皋展	11 / 30 (土) ~ 1 / 19 (日)

収蔵品紹介

[冬の夜神楽]

大森 運夫 ● OHMORI Kazuo

昭和49年(1974) 紙本着彩 169.4cm×369.2cm 第1回創画展出品
平成19年度購入

大森運夫は愛知県八名郡三上村(現在、豊川市三上町)出身の日本画家で、当館にとって重要な作家の一人である。

《冬の夜神楽》は新制作協会から独立した創画会第1回展に出品されたもので、作家の新たな強い意気込みが感じられる。《佐渡冥界の譜》(1973/第37回新制作展・当館蔵)

をはじめ、《山の夜神楽》(1975/第3回山種美術館賞展大賞・山種美術館蔵)や《島の鬼太鼓》(1977/第4回山種美術館賞展・愛知県美術館蔵)などと同様に、画面背景は金箔で荒々しく覆われている。前景には鬼の仮面を付けた祭の主役が配され、その周囲には見物人の姿が群像のような塊として描かれ、躍動感溢れる勇壮な雰囲気演出している。

特に《冬の夜神楽》は、《山の夜神楽》とともに東栄町や豊根村を中心とする奥三河山間部に伝承され、毎年11月から翌年3月にかけて、それぞれ地区ごとに延々と繰りひろげられる《花祭》(重要無形民俗文化財)を題材に取り上げた作品である。



鉦(まさかり)を振り降ろしながら舞う榊鬼(さかさおに)を中心に、独特な太鼓のリズムと横笛のお囃子に乗せて、「テーホヘ、テホヘ」の掛け声に合わせて踊る野良着姿の村人たちが活写されている。クライマックスの瞬間を切り取った大画面から醸し出される土俗的なダイナミズムが、観客を圧倒して魅了する。かつて「祭の画家」と呼ばれた大森運夫の代表作の一点であることに間違いはない。

2月22日より始まる企画展「鬼・オニ・ON I展」でも2階シンボル展示コーナーで、この迫力ある作品を紹介する予定である。

(豊橋市美術博物館主任学芸員 大野俊治)

編集後記

特に厳しい今年の冬、それでも「わびすけ」や「ろうばい」が咲き始めています。

アルジェリアのニュースに胸をしめつけられながら今これを書いているのですが、経済問題、食糧、民族、宗教、貧困…とあらゆる面で世界中が今までの仕組みを保てなくなったということでしょうか。息詰まるこの様な時、昨秋、豊橋市美術博物館であった「近代日本画の名作」展の静物や風景を思い出しますと、心が和みます。

さて、今回「風伯」Vol.84で取り上げた「安井賞」についてですが、日本の具象洋画に発展的な新しい方向性を見出そうとしたけれど、40年かけて出来なかったということでしょう。美術に決定的評価はなく、各々が折々に評価していくほかないと筆者は締め括られています。

話は変わりますが、先日の週刊朝日(2/1号)で、豊橋にゆかりの深い野田弘志氏について、私の大好きな安野光雅画伯が「逢えてよかった」と述べ、刻々変わる命を描こうとする写実作家の真髓として彼を尊敬しているという一文をみつ

けました。そして、安野氏は「絵には良否の尺度はない」とも述べています。その絵が「好きか嫌い」から始まるのです。

最後に、私事ですが、目を悪くしましたので、「風伯」の編集委員を辞任させていただく事にしました。辛い中にも楽しい時でした。本当にありがとうございました。

(神野能生子)

【表紙作品】

能面(般若) 江戸時代 魚町能楽保存会蔵

*「鬼・オニ・ON I」展(2/22～3/24)にて公開

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第84号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 鈴木冷子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成25年2月20日発行